

世界フロアボール選手権大会出場報告

Reports at FLOORBALL World Championships

樋口 賢太

Kenta HIGUCHI

1. はじめに

フロアボール (Floorball) とは、アイスホッケーから発祥した室内ホッケー競技でありスティックを使ってプラスチック製のボールを相手チームのゴールに入れて得点を競う団体競技である。スウェーデン語では Innebandy、ドイツ語では Unihockey という名称である。フロアボールは主にヨーロッパで盛んなスポーツであり、スウェーデン、フィンランド、スイス、チェコなどでは、プロリーグも存在する。また、シンガポール、日本、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、アメリカなどでも行われている。現在、国際フロアボール連盟 (International Floorball Federation) を中心にオリンピックの正式種目としての認可を目標として、世界的に競技の拡大、発展をしている。日本は、1983年から競技を始め、1995年にIFFに加盟し、世界で2番目の加盟国となった。1998年に第1回世界選手権大会が開催され、日本は第1回大会から出場している。現在、日本フロアボール連盟 (Japan Floorball Federation) には85のクラブが加盟しており、競技人口は約2300人である (世界競技人口は30万人)。

試合は1チーム6人で行われ、通常1ピリオド20分間で第3ピリオドまで行う。コートは40m

×20mの広さを持ち、周囲の高さ50cmのフェンスで囲みコーナーフェンスには丸みを持たせている。ルールはアイスホッケーに似ているがフロアボールは防具を付けずに (ゴールキーパーは着用する) サッカーやフットサルのようなユニフォームで競技をするため、アイスホッケーのように相手に強く当たってはならない。アイスホッケーのように選手の交代は自由にでき1チーム最大20人で構成される。ゴールキーパー以外のフィールド選手は、競技時間において1回の出場に1分ほどで交代する。1回の出場選手は激しい攻防を常に続けていくため運動量は非常に多いといえる。運動量はゲームの勝敗に関係してくるが、チームの戦術や技術などによって差が生じる。

ゴールキーパーは縦60cm×横160cm×高さ115cmのゴールの前に膝立ちをしてシュートを止めることが基本となり、縦4m×横5mゴールエリア内に体の一部 (手や足等) が残っていれば手を使うことやスライディングでボールを止めることが可能である。ゴールキーパーはスティックを持ってはいけないポジションのためスローを行うことができるが、投げたボールはセンターラインよりも自陣内でフェンスや床などに当てなければならない。

日本は、世界選手権やアジア・太平洋選手権な

表1 歴代WFC結果等

	開催年	開催国	開催地	優勝国	日本順位	出場国数
第1回	1996年	スウェーデン	ストックホルム/シェレフテオ/ウプサラ	スウェーデン	×	12カ国
第2回	1998年	チェコ	ブルノ/プラハ	スウェーデン	13位	14カ国
第3回	2000年	ノルウェー	ドランメン/オスロ/サルプスボルグ	スウェーデン	14位	16カ国
第4回	2002年	フィンランド	ヘルシンキ	スウェーデン	21位	24カ国
第5回	2004年	スイス	チューリッヒ/クローテン	スウェーデン	×	19カ国
第6回	2006年	スウェーデン	ストックホルム/ヘルシンボリ/マルメ	スウェーデン	16位	20カ国
第7回	2008年	チェコ	プラハ/オストラヴァ	フィンランド	16位	16カ国
第8回	2010年	フィンランド	ヘルシンキ/ヴァンター	フィンランド	15位	16カ国
第9回	2012年	スイス	チューリッヒ/ベルン	スウェーデン	15位	16カ国
第10回	2014年	スウェーデン	ヨーテボリ	スウェーデン	15位	16カ国

どの国際試合に初期の頃から出場しているが世界に比べて競技人口やチーム数が少なく、競技レベルも低い。そして、戦術に関しても大きな差がある。

2. 世界フロアボール選手権大会／戦績

世界フロアボール選手権大会とは、国際フロアボール連盟（IFF）が主催する大会であり、私はフロアボール発祥の地であるスウェーデンで行われた“2014男子世界フロアボール選手権大会”に選手として出場した。（表1）それぞれ世界大会の予選大会を勝ち抜いた16カ国が出場している。アジア枠からは日本・オーストラリア・韓国が出場した。予選は各ブロックの総当たりで1ブロック4カ国である。グループAとBは前回大会の結果により1位～4位のチームから各グループ2カ国、5位～8位のチームから各グループ2カ国で構成されたグループリーグで予選を行い各グループ上位2チームは決勝トーナメントの準々決勝へ、下位2チームはC、Dグループの上位2チームとプレーオフを行い、勝者が準々決勝へ進む。そのためC、Dグループの各下位2チームは13～16位決定戦に進むこととなる。（表2）

日本は予選の結果が全敗だったため、グループ最下位となりプレーオフ（13～16位決定戦）を迎えた。プレーオフ初戦はオーストラリアと戦い、

表2 WFC2014 グループリーグ

A	スウェーデン	ラトビア	フィンランド	ドイツ
B	ノルウェー	チェコ	エストニア	スイス
C	アメリカ	日本	韓国	スロバキア
D	オーストラリア	ロシア	デンマーク	カナダ



敗戦であった。最終戦は韓国と戦い、勝利を収めた。その結果、日本は15位で世界選手権を終えた。

また、今大会のベスト4は、スウェーデン・フィンランド・チェコ・スイスの順であった。地元開催であった王者スウェーデンは立ち上がりの悪さが目立ったものの、やはり底力は圧巻であった。そして、前回大会にも出場した時と比べて4強（スウェーデン、フィンランド、チェコ、スイス）以外の国のレベルが上がっているように感じた。日本は、前回大会と同じ順位であったが、韓国には予選で敗退していることや、オーストラリアがロシアに勝利したことなどからアジア勢も少しずつレベルが上がっているといえる。

3. 状 況

日本のフロアボールの現状は厳しい状況にある。私の定期的に行える練習は週に3日ほどしかない。そのほかは、ほかのチームの練習に参加することや、不定期に取ることができる体育館で自主練習をするというような形で日々練習を重ねている。競技人口が少なくマイナーなスポーツのため、フェンスを置いた正式な広さのリンクでの練習はほとんど無く、クラブのリンクはもちろんない。また、コーチは経験がある現役選手を中心に指導してもらっているため、現役選手にはさらに練習が削られている現状である。現に私も国土館大学に所属するフロアボールチームの指導をしている。その国土館大学フロアボールチームは日本フロアボール選手権大会（インカレ）が2011年から開催されるようになり、国土館大学男子チームは第2, 3, 4回大会を優勝し3連覇、女子は第3回大会から出場し、第4回大会を準優勝という好成績を残している。

日本代表として国際大会に出場しているが、遠征費は選手の実費であるため遠征費用を貯めながら練習を行わなければならない。また、代表の合同練習は週に1回程度のため世界との差を縮めるのはなかなか厳しい状況である。しかし、各地でミニフロアボール大会や講習会などの普及活動が定期的に行われていることや、最近では海外でコ



国土館の代表選手

ーチ経験がある方を呼んで指導をしてもらうなど着実に日本のフロアボールは成長しているといえる。

4. 国土館の代表選手

国土館大学の在学学生、卒業生の中からも代表に選ばれた選手がいる。(表3)

表3 国士館大学生 日本代表選手

名前	学部	学科	卒業年度・学年	主な出場大会
田島 達朗	文学部	考古日本史学専攻	平成20年度卒	WFC2010
渡邊 龍也	理工学部	理工学科	平成20年度卒	WUFC2010
倉田 翔平	体育学部	体育学科	平成22年度卒	WFC2014
高橋 克典	体育学部	子どもスポーツ学科	平成25年度卒	WFC2010U-19
柴 由紀	体育学部	子どもスポーツ学科	平成25年度卒	WFC2013
加藤 陽	体育学部	子どもスポーツ学科	平成25年度卒	WUFC2012
滝沢 光司	体育学部	体育学科	平成25年度卒	WUFC2014
入江 弘之	体育学部	子どもスポーツ学科	3年生	WUFC2014
岩崎 安奈	体育学部	子どもスポーツ学科	3年生	WUFC2014
倉場 俊圭	経営学部	経営学科	3年生	WFC2014
渡部 達也	経営学部	経営学科	3年生	WFC2014
佐々木 麻美	経営学部	経営学科	3年生	WUFC2014
後藤 由衣	体育学部	体育学科	2年生	WFC2013
島田 智之	体育学部	スポーツ医科学科	2年生	WFC2014
小林 俊太	体育学部	子どもスポーツ学科	2年生	WUFC2014
柴 尚希	政経学部	政治学科	2年生	WFC2014
齋藤 優介	文学部	教育学科	2年生	WUFC2014

WFC・・・世界フロアボール選手権大会 WUFC・・・世界学生フロアボール選手権大会



5. 最後

私は、今回が4度目の国際大会（世界大会は2度目）であった。前回大会は自分のプレーができなかったが、その経験を活かし、2年間練習したことで、今大会は全試合フル出場し、個人成績は前回大会よりも良い成績を残すことができたため自信になった。一方で今大会を通して1試合をチームとして戦えた試合がほとんど無かったことや初めてしっかりとした戦術に基づいて戦ったことで、ある程度の手応えをつかめたことからチームの結束力、戦術の重要性を痛感した。今後はこの経験を活かし、日々精進するとともに普及活動などにも役立てることで、日本のフロアボールに貢献していきたいと思った。

参考資料

国際フロアボール連盟ホームページ
<http://www.floorball.org/default.asp>
 日本フロアボール連盟ホームページ
<http://www.floorball.jp>

